

## 茨城県で捕獲された野生動物における病原体保有状況

茨城県衛生研究所 後藤慶子, 永田紀子

【背景】近年、野生動物の生息数の増加や人の生活圏侵入による被害が社会的問題となっている。ヒトへの感染が報告されている病原体の多くが動物由来であり、中にはヒトに重篤な症状を示すものもある。今回、茨城県で捕獲されたイノシシが保有する病原体を調査し、その実態を把握することを目的とした。

【方法】材料は、2015 から 2020 年に茨城県で有害鳥獣として捕獲されたイノシシの検体（肝臓、血液、糞便）およびイノシシに付着していたマダニとした。イノシシ検体を用い、日本脳炎ウイルスおよび E 型肝炎ウイルスの遺伝子検査を行うと共に、抗体検査も併せて実施した。マダニから重症熱性血小板減少症候群（SFTS）ウイルスおよび紅斑熱群リケッチアの検出を試みた。

【結果】遺伝子検査の結果より、イノシシ 162 頭中 2 頭（1.2%）から日本脳炎ウイルスの遺伝子を検出した。366 頭中 34 頭（9.3%）から E 型肝炎ウイルスの遺伝子を検出した。抗体検査の結果より、イノシシ 196 頭中 77 頭（39.3%）から日本脳炎ウイルスに対する抗体を、274 頭中 125 頭（45.6%）から E 型肝炎ウイルスに対する抗体を検出した。イノシシ付着マダニ 304 検体中 47 検体（15.5%）から紅斑熱群リケッチアの遺伝子を検出した。SFTS ウイルス遺伝子は検出されなかった。

【結論】今回の調査で、茨城県で捕獲されたイノシシにおいて、ヒトに重篤な症状を示す病原体の保有状況が明らかとなったことから、今後も調査を継続し、実態把握に努めていきたい。